

# 学会ニュース

日本女性学会

第11号 1982年9月

## 日本女性学会第3回総会と公開講演について

日本女性学会の第3回総会が、57年6月19日(土)神戸女学院大学において開催された。はじめての関西地区での総会であったが、6月のさわやかな季節にめぐまれ、関東地区からの参加者も多く、盛会であった。今回の当番校に所属のカサリン・ブロデリック、矢木公子両氏の御尽力に心から謝意を表したい。

まず総会は(司会 野口 栄子)、藤枝滯子代表幹事が開会の挨拶で、日本の女子高等教育に明治以来、大きな役割を果たしてきた神戸女学院で関西地区の第1回の総会がおこなわれたことの意味が強調され、ひきつづいて神戸女学院大学 岡本道雄 前学長(現院長)より特にご挨拶があった。神戸女学院大学について以前に「朝日ジャーナル」の百万人の大学で、藤枝さんがたいへん素晴らしい紹介文を書いてくださったが、この大学は東京で明治3年につくられ、この西宮のキャンパスに来てからでも来年で100年を迎える。キリスト教の婦人宣教師によって開かれたこの土地は、尼崎藩主桜井氏の別荘のあった岡田山であり、敷地の中には日本最初の式内社があって、神社として他へ移転できないまま学内に遺されている。本学は女子大である。アメリカではフェミニズム運動の影響で1960年代には共学化がすすんだが、共学は男性中心社会の縮図でしかなく、別学にこそ意味があるという立場から70年代には、かなりの大学が女子大にもどったということもあり、80年代の女子大学の課題は、女子教育、生涯教育にあり、アメリカでは女子の学長も増加している。このような時期に本学で日本女性学会の総会を開催していただいたことをたいへん嬉しく思うという趣旨であった。

つづいて経過報告が福井浅子幹事よりおこなわれ、過去1年間の本学会の例会、国立婦人センターでのシンポジウムにたいする代表者の参加、ニュースレターの発行に関する報告などがあった。また幹事会が度々開催され、幹事会ニュースの担当が福井氏によって記録されたこと、現在の学会員数は214名であることなどが付加えられた。

会計報告は小林富久子幹事によってなされ、会計監査の三木草子氏より問題のない旨の証明がおこなわれた。ただその際三木氏によって、通常の会計監査では問題にならないかもしれないが、切手代・コピー代などの領収書に明細があればいっそうよいのではないかという意見が添えられていたことを報告しておきたい。

今年度活動方針は白井堯子幹事よりなされ、今年度は役員改選の年であるから、新役員を中心にすすめたい。従ってここではまだ方針は決っていないわけだが、旧幹事会として研究例会(3ヶ月に1度)の

充実などを考えている。日本における女性学はなかなか大学などでも受け入れられ難いが、この辺りでようやく定着してきたかと思われる。本学会も3回めの総会を迎え、大切な年だと思うので、皆さまとともに頑張っていきたいという趣旨であった。

ひきつづき役員改選がおこなわれ、代表幹事として藤枝濠子・松原純子・白井堯子の3名が決定した。(駒尺喜美氏が1年間内地留学で関西に行かれるため、松原・白井両氏が代られた形となった。)その他の幹事として、渥美育子、今井泰子、漆田和代、北沢杏子、亀山美知子、キャサリン・プロデリック、桑原糸子、小林富久子、志村緑、杉山秀子、内藤和美、野口栄子、福井浅子、水田宗子、溝口明代、矢木公子、米田佐代子の各氏が選ばれた。

昼食をとりながらその場の出席者で自己紹介などがなされ、午後1時から公開講演に移り、南カリフォルニア大学助教授で帰国中の水田宗子氏の「女が自分を語る時 — 宮本百合子とポーボワールの自伝小説を中心に — 」というたいへん興味ぶかい講演がおこなわれ、参会者に感銘を与えた。公開講演の司会は北沢杏子幹事で、明快な司会により、途中でグループに分かれて参加者が話し合い質疑するという新しい形式がとられ、好評であった。

以下講演の要旨をまとめる。まず最近の傾向として、女性が自伝的要素をもって自己を語るが多い。そのことを従来の男性中心の男性の側からの小説と対比して考えると、女性は常に男性側の記述する主体によって記述される客体であったが、その要素を破壊しようとするあらわれといってもよい。女性が自らの手によって内側を語ろうとするとき、それは自伝の形をとることになる。そしてそのことは19世紀以来の自己認識の方法の展開と無関係ではない。女性は自分を取りまく多くのテーマを、自己語りという新しい小説の形式で作りだしていったのである。他者と自己、差異と関係、自我とその欠落の意識などを通して、近代文学の大きなテーマのなかに女性作家が登場してきた。それを3つの問題に分けて考えると、「(1)母性神話への回帰」「(2)魔女性の復活」「(3)深層心理の切り捨て」ということになるかと思う。(1)は岡本かの子、アナイス・ニンの日記や自伝にみられる母胎回帰希求といってもよい。(2)は河野多恵子や高橋たか子などにみられる不妊自覚、体制内に生きない決意というもので、(1)の裏返しともいえようか。宮本百合子とポーボワールは(3)に属し、自己の内部に沈潜することを脱して、社会という要因を導入した。そのため自己の原点を即自：対自という実存的なエロスを越えた側面から把握している。その点を考えないと宮本百合子はつまらないといわれたりする。21世紀は「性ばなれの時代」になるであろうといわれるが、それはすでに女性が自己を語る文学の中に萌芽しているといえるだろう。

(文責 野口栄子)

(なお、総会にたいし神戸女学院より、本学会に5万円補助していただいたことを記して御礼を申しあげたい)

# 秋のシンポジウム

## おんなの性と人権

— 古代から現代までの分娩の歴史を中心に —

日時 1982年11月27日(土) PM1:00~PM4:30

場所 日赤中央女子短大講堂 東京都渋谷区広尾4-1-3  
(国電渋谷駅より日赤医療センター行 学バス10~15分)  
(地下鉄日比谷線広尾下車徒歩3分)

### 公開プログラム

- |         |                                      |                      |        |
|---------|--------------------------------------|----------------------|--------|
| ■ 開会の挨拶 | 日本女性学会について                           | 亀山 美知子(京都市立看護短期大学講師) | 5分     |
| ■ スライド  | ハッカード著「古代医術と分娩考」<br>スピアート著「産婦人科学の歴史」 | より 北沢 杏子(評論家)        | 40分    |
| ■ 報告者   | 婦人科医史学の上から                           | 石原 力(虎の門病院産婦人科部長)    | 15分    |
|         | 民族学の上から                              | 青木 やよひ(評論家)          | 15分    |
|         | 母子保健の上から                             | 宮原 忍(東京大学医学部助教授)     | 15分    |
|         | 社会学の上から                              | 落合 恵美子(東京大学社会学研究室)   | 15分    |
| ■ 討 論   | 司会 北沢 杏子                             |                      | 休憩 20分 |
|         | 会場でのグループ討議                           |                      | 80分    |
|         | 報告者への質疑と応答                           |                      |        |
|         | グループ代表による意見の発表と反論                    |                      |        |
| ■ 閉会の挨拶 | 日本女性学会入会の誘い                          | 内藤 和美(東京大学母子保健学教室)   | 5分     |

### ■ 古代医術を分娩考・産婦人科の歴史の内容とシンポジウムの企画意図(文責 北沢 杏子)

「女子の地位は、その国の文明の進歩を示すインデックスである。而して、その国の女子の地位は、出産の際における手当の如何によって、最もよく測ることができる。故に、その国の文化が発展するか、また退歩するかを見るには、その国の出産の歴史を見るに如くはない」の書き出しで始まるハワード・W・ハッカードMDの『古代医術と分娩考(原題:悪魔薬・医師)』(昭和6年刊行の復刻版)は、いまから50年前の昭和初年のわが国で翻訳出版され、そのラジカルな思想、文明批判的な視野から鋭く切りとってみせた出産の歴史は、当時の医学生・女性運動家・ナース等に大きな影響を与えた。報告者石原力氏は、戦後の焼跡の古本屋でこの初版本を手に入れ、それが後に「産婦人科の歴史に関心を持つきっかけとなった」と告白している。

本書中、とくに中世紀の宗教思想からきた禁欲的な社会背景が、妊産婦に加えた圧力(祈禱師・素

人の産婆・胎児の引き出し手術ほか)の記述は、中世紀の女たちの悲鳴や号泣がきこえてくるような背筋が寒くなるような迫力がある。18世紀も後半になって、やっと産科医が分娩を扱うようになるが、ここでもさまざまな試行錯誤が行なわれており(医師が伝播した産褥熱による産婦の死など)まさに女の受難の歴史をほうふつとさせる。

では、現代医学では理想的な分娩が行なわれているだろうか? 計画分娩の名のもとに、産婦に投与される陣痛促進剤や、会陰保護に消極的であること、麻酔を用いた無痛分娩などに対する産婦たちの不満はふくれ上っている。

本シンポジウムは、出産および母子保健・母性保障の問題点を「女の性と人権」の視点から洗い直そうという次第。200人収容の会場を満席にして、白熱の討論を展開するつもりです。

## 9月の研究報告会のお知らせ

日 時 9月25日(土) 午後2時より5時まで

場 所 京都市立看護短期大学 京都市中京区壬生東高田町1の2

交 通 阪急西院駅より南へ徒歩10分

京都駅より市バス205番(金閣寺・北大路駅行)西大路五条下車徒歩2分

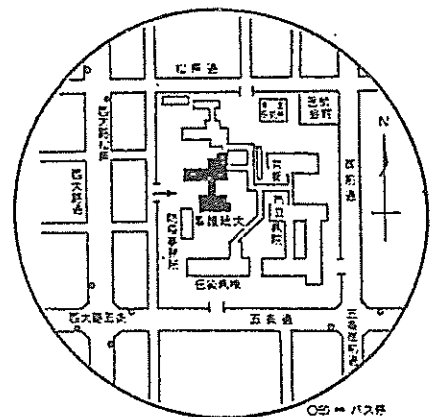
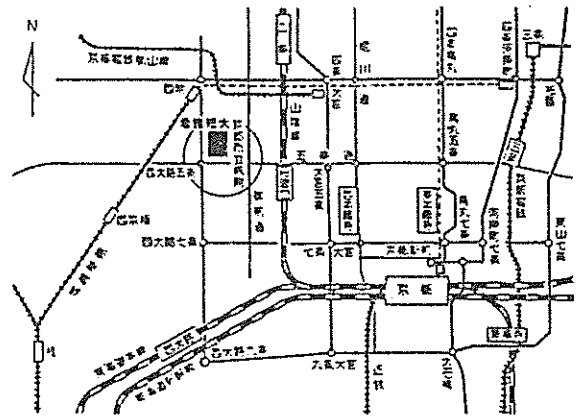
テ ー マ :

'82 モントリオール国際女性会議に参加して

報告者 神戸女学院大学 矢木 公子  
精華大学 ジェニソン・ベッキー  
// 田 中 英 子

女性に関する研究・教育活動を討議することを目的として、コンコルディア大学レモヌ・ドヴォワール研究所が7月26日～8月4日の10日間に開いた同会議には、80ヶ国以上から350人ほどの人が集りました。この10日間の全体会議、ワークショップ、地域ごとのミーティングの模様を中心に報告したいと思います。とくに私たちの参加したアジア地域部会は、AWRANと称するネットワークを作ることになり、ニュースレターの発行、地域部会の開催など、具体的に決めたことがありますので、その点について詳しく報告したいと思います。

(矢木 公子)





## 新入会員紹介

- 竹原 増子  
南 條 睦子 文化女子大学助教授  
「服装デザイン画専門 女性学」  
沢 田 雅子 三愛 「流通業界における女子  
社員の職業イシキ」  
善 積 京子 大手前女子短大 家族社会学  
平 尾 妙子 ノートルダム清心女子大家政学科  
家庭経営学  
服 藤 早 苗  
荻 野 美穂子

## 会員からの連絡

- 「まいっちゃんぐマチコ先生」に抗議する会より、会の活動状況報告、アピールをいただきました。会員の渡辺和子さん、または事務局へのお問い合わせをお待ちしています。

北沢杏子さんより

- スライド 正しく知ろうシリーズ「避妊—男女交際と責任」北沢杏子 脚本/演出 アーニ出版の解説台本を御寄贈いただきました。ご活用なさりたい方、興味がおありの方、ご連絡下さい。

## 事務局からの連絡

- 思想の科学「女性学入門」の事務局ストックがあと15冊あります。お入用の方、切手600円分同封の上事務局へご連絡下さい。
- 総会出欠葉書に入れてあった、研究報告の予定に間するアンケートに対し、24名の会員より1、2年以内に研究報告をしてもよいとのお返事をいただきました。この潜在的エネルギーを吸収し、建設的に生かすべく、今後の研究報告会等のプログラムを検討中です。
- S57年度会費を未納の方、郵便振替口座 東京 8-49189 日本女性学会まで 4,000円をお振り込み下さい。

## 幹事会だより

最近会費を滞納される方が出はじめました。この頭の痛い問題に対して、ニューズレターに名前を公表しようという強硬派から、会の運営を魅力的なものに、というソフトムード派まで様々ですが、お心当りの方、どうかこのコラムをお見逃しなく！

## 編集後記

- 永い間このニュースの編集を引きうけてくださった漆田さんが、このたび休みたいといわれ、また編集をお引きうけすることになりました。今回は関西の亀山美知子さんが全面的に助けて下さるので、仕事のおそい私には何よりです。たちまち亀山さんのごめいわくをかけています。また関東地区大賀美弥子さんにも従来通りお手伝いを願いますので安心です。

(野口 栄子)

- 突如として幹事になり、突如としてお仕事をお引き受けし、突如として編集をお手伝いすることになりました。こうなったら何でも前向きに取り組むのみ。9月の研究報告会で皆様にお目にかかれることを楽しみにしております。

(亀山 美知子)

---

発行所 日本女性学会

〒103 東京都中央区八重洲1-4-21

共同ビル13F 西洋美術研究会内

電話 03-274-1791

---